

論文の内容の要旨

論文題目 情報と不均衡の動学分析

氏名 村館靖之

論文要旨

本研究ではマクロ経済モデルの批判的検討を行う。特に総需要と総供給の乖離した状態が持続するマクロ的不均衡分析の復権を試みる。産業連関表に基づく不均衡分析の数値計算(3部門)を行う。

研究の背景にある問題意識は、ワルラス・パレートの一般均衡理論とケインズのマクロ経済学を統一的に理解したいという思いがある。近年、動学的一般均衡モデルやマクロ経済学のミクロ的基礎付けというテーマで研究成果が蓄積されている。New IS-LM モデルは動学的一般均衡モデルをベースにした新ケインズ派経済学のベンチマーク的なモデルである。現在の研究の主流は動学的一般均衡モデルである。動学的一般均衡モデルに関する研究はミクロ的基礎を持たない伝統的ケインズ経済学を駆逐した。不均衡に関するケインズ経済学の研究も主流ではない。実は不均衡の経済分析が現実的であるということ論じるために、ミクロ的基礎を持った不均衡モデルを開発する必要性が生じている。

本研究では新ケインズ派モデルと不均衡動学モデルを統一的に記述した新しい不均衡動学モデルを提案する。

具体的な研究課題は以下のとおりである。

課題1：貨幣の機能と情報の関係を分析する

課題2：不均衡動学モデルと独占的競争の一般均衡モデルを統一的に説明する

課題3：不均衡動学モデルと動学的一般均衡モデルの数値計算を行い、その性質の違いを探る

第一章では貨幣に関する概論を古典研究(限界革命前後からケインズまで)を中心に述べている。特にマルテッロ、パレートの貨幣に関する議論を取り上げている。マルテッロはパレートが高く評価していたイタリアの経済学者で、その貨幣論は貨幣的不均衡や貨幣的恐慌について論じている点特徴的である。パレート『経済学提要』(1906)ではマルテッロの影響を受けた真の貨幣と偽の貨幣に関する議論があり、パレートは貨幣数量説に批判的であった。パレートは経済恐慌に関する議論も行っている。パレートの経済恐慌に関する議論はケインズ以前の経済学者が景気循環についてどのように捉えていたかがわかるので興味深い。貨幣と不均衡はコインの両面のような存在であり、不均衡について論じる前に、まずは貨幣について考察を行う必要がある。

第二章では新ケインズ派モデルについて検討を行う。独占的競争の一般均衡モデルという視点で先行研究をサーベイし、特に標準的な New IS-LM モデルと粘着的情報モデルについて数値計算を行っている。さらに New IS-LM と不均衡動学モデルを統合・一般化した新しい不均衡動学モデルを提示した。

まず表を用いて RBC、New IS-LM、粘着的情報モデル、不均衡動学モデルについて概観・比較を行う。ブランシャール&清滝モデルをもとに独占的競争の一般均衡モデルという観点から、New IS-LM、粘着的情報モデルについてサーベイを行う。Dynare を用いて数値計算によって New IS-LM モデルと粘着的情報モデルの性質の比較を行った。Dynare を用いた数値計算結果では、New IS-LM モデルはショックを与えた後、すぐに定常状態に回復するが、粘着的情報モデルではショックを与えた後、数ステップ定常状態に回復するまで時間がかかることがわかる。

動学的一般均衡モデルは合理的期待仮説のもとで、全ての財・サービスの需要と供給が一致し、定常状態に収束する状態を分析する。一方で、適応的期待仮説や不均衡の問題、定常状態からの乖離を扱うようなモデルとして不均衡動学モデルが存在する。

第三章では、不均衡動学モデルについて産業連関表を用いて分析を行い、MATLAB を使った不均衡動学モデルの数値計算を行っている。産業連関表からは、投入係数、付加価値率、労働分配率、TFP という情報を得た。主に生産関数を推計するのに産業連関表を用いた。岩井モデルの前半部分である「ヴィクセル的不均衡動学モデル」について要約を行い、岩井モデルと産業連関表(主に生産関数)をもとに数値計算を試みた。岩井モデルの特徴は適応的期待、生産ラグ、正常稼働率、ショートサイド原理、製品需要の活発度(製品需要関数のシフトパラメータ)および労働供給の逼迫度(労働供給関数のシフトパラメータ)の分析にある。

本研究では不均衡動学モデルの数値計算を行う際、市場のノイズ的要素を表す攪乱項のウェイトという概

念を導入し、攪乱項のウェイトを動かすことで、製品市場および労働市場の分散がどう動くかを分析した。分析から得られた中心的論点は以下のように要約出来る。

「市場のノイズ的要素の減少⇒情報の非対称性の減少⇒経済システムの効率性の達成」

この論点から得られる主要な結論は経済システムにおける情報の役割が決定的に重要であり、情報の非対称性を減少させる政策を採れば経済を効率性を満たすことが出来、逆に情報の非対称性を増加させる政策を採れば、経済は不均衡状態になる。

第四章では、独占的競争の一般均衡モデルおよび不均衡動学モデルの分析から得られたモデルの含意について議論を行っている。Blanchard&清滝型の独占的競争の一般均衡モデルに基礎をおく New IS-LM モデルおよび粘着的情報モデルと、不均衡動学モデルは独占的競争という同じ前提から出発して、全ての財・サービスの需給が均衡する一般均衡モデルと、総需要と総供給が不均衡状態にある不均衡動学モデルという異なった帰結を導いている。

動学的一般均衡モデルが合理的期待や対称均衡を仮定している一方で、不均衡動学モデルは適応的期待のもとで対称均衡から離れた不均衡状態を分析している。モデルから導ける政策的含意は、不均衡動学モデルでは十分時間が経過した「長期」においても貨幣が非中立で金融政策は有効であるが、新ケインズ派モデルでは一般に価格が伸縮的な長期において貨幣は中立で金融政策は实体经济に影響を与えない。不均衡動学モデルの分析からは製品市場より労働市場の需給や価格決定問題が複雑で、複数の政策手段で関与する必要があるとわかる。不均衡動学モデルの特徴はインフレーションと失業率のトレードオフはいつになってもなくならないと主張している。

本研究では情報の経済学の観点から、岩井の不均衡動学モデルを見直し、その価値を再認識することで、実は不均衡の動学分析が現実的ではないかと問題提起を行った。そのための手段として、新ケインズ派モデルと岩井モデルの関係の整理や岩井モデルを含んだマクロ経済モデルの数値計算を試みた。

情報の非対称性の度合いが増えれば増えるほど、経済は均衡から離れて、非効率的な状態になる。逆に、経済が均衡に近づき、効率的な状態に近づくほど、情報の非対称性は解消される。つまり情報と不均衡は深い関係にあり、情報と不均衡の動学分析を行い、情報の経済学の視点から、不均衡動学を再評価、拡張するのが本稿の主題である。